

病変への正確なナビゲーションに有用で, eloquent area でも術後の機能を最大限温存できる.

66) Parkinson 病に対する視床下核刺激術の一例

仁村 太郎・安藤 肇史(国立療養所宮城病院)
脳神経外科
吉本 高志(東北大学)
脳神経外科

近年, Parkinson 病に対して外科的治療が見直され, 行われているが視床下核刺激術もその一つである. 我々は薬物療法では限界のため両側視床下核刺激術を施行し, 有効であった一例を提示する.

【症例】62歳男性. 13年前に右上肢の振戦にて発症. 近医神経内科で Parkinson 病と診断され, 薬物療法を行われていたが徐々に薬物が増量し, 2年前より wearing-off, dyskinesia, 幻覚などの副作用が出現し, 薬物療法の限界と判断され, 当科に手術目的で入院した. 【所見】入院時 Yahr 4/5, UPDRS 81/149 (Max=259), England & Schwab (E&S) 60/50%であった. 手術は幻覚などの副作用があるため, 薬物の減量を目的として両側視床下核刺激術を行った. 【術後経過】術後, 特に合併症もなく, 術後一ヶ月の評価では Yahr 3/4, UPDRS 58/87, E&S 90/80%と著明な改善を認めた.

【結語】両側視床下核刺激術は進行した Parkinson 病患者, 特に薬物による幻覚などの精神症状を伴い, 薬物増量が困難な患者に有効である.

67) Awake surgery が有効であった左上側頭回皮質下腫瘍の1手術例

朽木 秀雄・桜田 香
遠藤 広和・斎野 真(山形大学)
斎藤伸二郎・嘉山 孝正(脳神経外科)

症例は49歳女性. 全身痙攣にて発症した. MRI にて左上側頭回皮質下に径約15×18×20mm の造影効果を示す腫瘍陰影を認め, 当科紹介となった. 画像から malignant lymphoma を疑い, ステロイドパルス療法を行ったが, ステロイド抵抗性であり, 急速に増大したため, 開頭手術を行うこととした. 術前の検討で, 病側が優位半球であり, 病巣は上側頭回皮質下にあるため, awake surgery による言語機能マッピングを行い, 摘出術を行うこととした. 術中所見では腫瘍は予想通り言

語機能を有する上側頭回の皮質下にあったが, sylvian fissure に入り, insula 寄りからアプローチすることで言語機能を温存しつつ腫瘍を全摘し得た. awake surgery による言語機能マッピングは, 言語野近傍腫瘍の摘出に大変有用と考えられた.

68) 片側顔面痙攣における術中異常筋反応モニタリング

山下 慎也・川口 正
福多 真史・渡部 正俊(新潟大学)
田中 隆一(脳神経外科)
亀山 茂樹(西新潟中央病院)
脳神経外科

【目的】片側顔面痙攣(HFS)に対する顕微鏡下血管減圧術(MVD)の術中モニタリングとしての異常筋反応(AMR)の有用性を検討した. 【対象・方法】AMRモニタリング下にMVDを施行したHFS72例, AMRは全身麻酔後, 病側顔面神経頰骨枝を針電極にて刺激し頤筋より, 同様に下顎枝を刺激し眼輪筋から記録した. 記録は開頭前後・硬膜切開前後・小脳圧排前後, 減圧前後など各要所ごとに行った. 【結果】72例全例で開頭前にAMRが記録された. 閉頭時にAMRが完全に消失していた例は67例(93%)で, そのうち52例は責任血管減圧時に, 3例は責任血管が分枝している椎骨動脈の移動により, 8例は小脳圧排時に, 4例は硬膜を切開し髄液が流出した時点で消失した. 残りの5例は完全には消失しなかったが, 一枝刺激のみの軽度残存または波形の減弱が認められた. 術後HFSは70例が完全に消失したが, 1例に軽度残存, 1例で術後1年目に再発を認めた【考察】術中AMR消失例での術後HFS消失例は67例中65例(97%)と高率であり, 有用な術中モニタリングである.

69) 血行再建にて酸素代謝障害が改善した脳虚血症例

木内 博之・鈴木 明(秋田大学)
笹嶋 寿郎・溝井 和夫(脳神経外科)
戸村 則昭(同放射線科)
畑澤 順(秋田県立脳血管研究センター放射線科)

血行再建術にて脳血流量(CBF)や酸素摂取率(OEF)の改善はしばしばみられるが, 脳酸素消費量(CMRO₂)が改善することは稀とされている. しかし, 今回, 我々は, PETにてmisery perfusionを呈し,